

# 聞き取り調査

## 抑留体験記

東京都 小林 保

生年月日 大正十年六月十七日。

現役入隊時の住所 北海道空知郡上砂川町字上砂川二  
十二番地。

軍 歴 昭和十七年三月一日 北部四十二部隊

(歩兵) 入隊、樺太上敷香。

昭和十七年二月二十五日、北海道旭川駅午後十二時  
集合、夜行列車にて稚内に向かう。翌朝、稚内駅到着。  
直ちに宗谷海峡を渡り樺太大泊港入港、臨時列車にて  
上敷香に向かう。二十七日、北部四十二部隊(歩兵)

に到着。諸手続、検査等あり、三月一日入隊。

昭和二十年一月、下士官候補として、北部四十四部  
隊(樺太工兵隊)に転属。二十年四月、陸軍伍長に任  
官。六月、陣地構築のため豊原に南下、豊原の山中に  
陣地構築作業中に八月十五日、終戦の大詔が発せられ  
た。

翌十六日午後『自衛戦闘はあくまで継続すべし』と  
いう大本営命令が届いた。

樺太工兵隊は、北緯五〇度の樺太国境線に向かう部  
隊と、間宮海峡を真岡沖に進んだソ連軍艦の砲撃、上  
陸部隊に対する二部隊に編成され、私たち四中隊は北  
緯五〇度の日ソ国境線に向かった。

途中、知取(しりと)り)まで北上時、上部からの命  
令で知取小学校で待機していたが、八月二十一日、豊

原に引き返すよう命令があり、二十二日午前十一時ごろ、豊原の仮兵舎（幕舎）に戻る。すると、休む間もなく午後三時ごろ、ソ連飛行機の爆音が聞こえ、しばらくして爆弾の投下が始まった。下から見上げると、細長く斜めに豊原市内方面に投下された。私たちは直ちに投下された方面に急ぐ。

豊原駅前広場には引揚げ列車を待つ避難民があふれていた。直撃を受けた駅前には正に地獄絵図そのものだ。モンペ姿の女性の後ろ姿がある、前に回って見ると首がない。死んでいる女性を抱き上げると、下に死んだ赤ん坊を抱いている。このような状態の死者が一面に重なっていた。この火災は翌朝まで燃え続け約四百戸を焼き、死者、数百人であった。私たちはこの人たちをトラックに乗せて火葬場に運んだ。

#### 武装解除及び捕虜収容所

八月二十五日、各自に支給されていた兵器、部位が所有していた爆弾等をソ連側に渡し、ここに無条件降伏をし抑留生活に入る。

北豊原の樺太興農製糖工場農場の倉庫、牛舎、豚舎

を改造し、これを捕虜収容所とし、周囲には高さ四メートルくらいの有刺鉄線による鉄条網が張り巡らされ、四ツ角には監視の望楼が建てられ、四六時中監視されていた。

工兵隊は技術者の集団であり、作業は主に建築、架橋、森林伐採等であった。

作業は日曜を除く毎日で、収容所出発は朝七時で、作業終了は大体午後五時か六時ごろで、収容所に帰るのは午後六時から七時ごろである。

作業出発時から作業中、帰路時まで必ず監視のソ連兵が二人くらいついて、作業人数の多いときは、四人のときもあった。

食事は主に二百五十グラムの黒パン一切れで、時にオートミールが少量出ることもあった。

重労働で食べる物もなく、作業場近くのゴミ箱から魚の頭や骨を拾い、タンポポの葉を飯盒で煮て、塩味もないスープをすすり飢えをしのいだ。作業内容も常にノルマ、ノルマで厳しいものであった。

特に国境近くの古屯（コトン）方面に森林伐採に行っ

た人たちは大変厳しい作業で、病人も多く出て、收容所に帰ってきたときは大半が半病人のようであった。

これを「古屯地獄の殺人部隊」と言っていた。今でも当時の仲間が集まると、必ずこのことが話題に出る。

この間ある夜、私は突然起こされ、持ち物を全部持って外に出るよう命じられ、外に出てみると三中隊の顔見知りの下士官が不安そうな状態で立っていた。何の目的でどこに行くのかと質問しても、何も説明してくれない。そのうち自動車が出来て二人はその車に乗せられ、いずこともなく連れて行かれた。真夜中に何時間も車に揺られながら、明け方ある建物の前で降ろされた。中に入って見ると十人くらいの日本兵がいた。よその收容所から私たち同様連れてこられたことがわかった。

三十分くらい待たされていたそのとき、ソ連の将校（中尉か大尉であったと思う）が入って来て、上手な日本語で、「これから十日間、君たちに共産党の歴史について教育しますから、よく勉強して、教育が終わりましたら、それぞれの收容所に帰って、君たちが先

生になって共産党の歴史について教育しなさい」と言われて、日本語で書かれた『共産党の歴史』という分厚い本が全員に配られた。

それから毎日、午前九時ごろから昼食をはさんで午後四時ごろまで続けられた。内容は、共産党の歴史の他に赤旗の歌の練習等であった。

教育期間が終わり、また夜中に、一緒に来た三中隊の下士官と二人、車に乗せられ收容所に帰った。その後は月一回火曜日、午前七時から九時までの二時間、共産党の歴史を話したが、だれも聞いていない人はいない。しかし、この日は二時間だけ仕事をしなくて済むので、極めて静かにしていた。

昭和二十三年九月末、毎日待ち続けた帰国命令が出て、真岡港に向かった。

真岡に一週間ぐらい置かれ十月五日、徳寿丸（とくじゅまる）に乗船、真岡港を出て翌十月六日函館港に入港した。

帰国時、栄養失調になって首の周りが吹き出物で、しばらくの間通院を続けた。